仮面ライダーEnoch

山石 悠

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

義に飢え渇く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。

マタイによる福音書４：６

もし神が人々を愛しているというのなら、どうして俺をこんな目に合わせたのだろう。

俺がほしかった世界は、俺がなりたかった俺は、こんなものなんかじゃなかったというのに。

ああ、神様。

この残酷な試練を、早く終わらせてください。

どうか、お願いします。

※注意

・仮面ライダーの二次創作ですが、オリジナルのライダーしか登場しません。

・この作品は実在の人物、団体などは関係ありません（言ってみたいだけ）。

・感想も多大に受け付けますが、アドバイス等もいただけると幸いです。さらに注文を付けるなら、豆腐メンタルに優しい言い方にしていただければと思います。

・話にたびたび聖書の引用が入りますが、作者が持ってる新共同訳

聖書を用いています。また、作者はクリスチャンでなければ聖書をきちんと読み込めていると自身を持って言える人間でもないです。また、作中の人物もそういう人間ではないので、間違った解釈をする可能性が多大です。登場人物の勘違いは訂正していくつもりですが、作者の勘違いは後学のために教えてください。

目　次

1節―始まりの福音―――――――――――――――1
2話―変身―――――――――――――――――12

1節―始まりの福音―

城西大学　理工学部研究棟２１１号室

工具箱に手を伸ばしたところで、ブラインドの隙間から光が差していることに気が付いた。

立ち上がって照明を消してブラインドを上げれば、朝日が研究室に差し込んでくる。まぶしい。

「うぅ……もう、朝か」

自然光から目をそらして一度だけ大きく伸びをする。体中の関節があからさまな音を立ててなりだし、少しだけ体がほぐれるような感覚がした。

充電が残り数％しかないスマホを取り出せば、そこには７：２６という数字が表示されている。

「あーあ。とうとう貫徹しちゃったよ。今日、ＴＡだってのに」

深夜テンションでいまだ眠気を感じないまま、ゆっくりと後方に組み上げられた〝それ〟に近づいた。

「だいぶ進んだし、今日はＴＡまで寝るかなぁ……」

特に塗装もされず金属の質感が丸出しの〝それ〟は、人の外形を象るような……まるで、人が装着することを想定しているかのようなつくりであった。

事実、それは人間用身体機能補助具――パワードスーツ――である。

これが、人間工学を専攻する彼の研究室での研究テーマだ。動力を用いることなく、人間の身体能力を補助する器具。人の何気ない動きを阻害せず、うまく人の動きを補佐できるか。

人間の様々な関節の動きを解析し、それを最も補助できるような機構を組み立てていく。言うは易く行うは難しが当てはまるように、長い時間をかけて引き継がれてきた研究テーマだ。

これまでこの研究室にいた先達が徐々に作り上げてきたものを、ようやく彼が完成させることができそうだった。

「よいしょっと」

人間用身体機能補助具（パワードスーツ）を研究室の隅へと運び、工具を片付ける。
スマホをモバイルバッテリーにつないで椅子の傍に置く。アラームはＴＡ（授業補助員（ティーチングアシスタント））のバイトが始まる３０分前にセット。
椅子に寝転がれば、先ほどまでは全くなかった眠気がどっと襲ってきた。重苦しい倦怠感と眠気に身を任せ、彼は固い椅子の上で眠りについた。
だからこそ、彼は気が付かない。
ただ人の子であるがゆえに、預言者ではないがゆえに。
「……ん……」
福音は、彼のすぐそばで鳴り響いていた。

呉羽市　某所
セルカ棒にスマホをセットして伸ばし、自分が映る角度になったところでスイッチを押した。
動画撮影アプリが起動して、その瞬間から撮影が始まる。
「はーい、どうもー。フリューゲルでーす」
背中に翼の生えたパーカーに、狐面をつけた若者。
夜中にこんな姿で徘徊しているところを見られたら通報案件であることは重々承知しつつ、俺はテンションの高い声でしゃべる始めた。
「今日は呉羽市ってとこに来てみましたー。いやぁ、静かっすねぇ。うちの地元みたいにバイクが走ってたりしないもんなんですかね～？」
見えもしない笑顔を作りながら、周囲の風景を撮影する。
フリーの動画サイトは、広告による収入を得ることが可能だ。一回分の視聴をしてもらったところでもらえる金額など1円にも満たないわけだが、それでも膨大な視聴数を記録することができれば生計を立てることも難しくはない。
かくいう俺も、日本中を放浪しながら動画を撮影。そして動画サイトにアップすることによって広告料を得ている。これだけで生活し

ているとは少し言えないが、これである程度の生活を成り立たせることができる程度には人気の動画配信者であるってわけだ。
ここ、呉羽市に来たのは完全な気まぐれだ。
今の俺は北海道から沖縄に向かって南下している途中で、この街はその道中に立ち寄った場所、くらいのものでしかない。
「ちょっと不良の抗争でも見たかったところなんだけどなぁ」
俺の放送する動画【日本深夜珍道中】は、真夜中に町中を歩き回って面白い人や事件を撮影するというものだ。いつもは、不良同士の喧嘩とか、結婚してそうなオジサンが若い女を連れてピンク色の建物に消えていく様を、面白おかしい実況やら乱入をしつつ流すのだ。特に、後者なんかはうまくすれば、臨時収入や臨時宿を手に入れることだってできる。
もちろん、こんなことしていると撮影した相手に恨みを買ったりすることもあるのだけれど、そこはいろいろとうまくやり過ごしている。
まったく、こんなアングラな放送で数字が取れるんだから、世の中の若者達は相当ストレスでも溜まっていることなんだろう。
そして、こんなことを言いつつ動画配信をやめようと思わない俺は、もっとストレスが溜まっているってことなんだろう。
「さて、それじゃあ早速、この街の様子を見てみましょうかー」
だが、そんなことはどうだっていい。
段ボールが腐っていたら、中のミカンだって腐るに決まってる。
結局、この世界なんて腐りきったミカン箱にも劣るような場所だってことだ。

城西大学　理工学部研究棟２１１号室
「おーい。岸波、起きろ～」
「……んー」
時刻は午前１０時。
椅子がガタガタ揺らされ、上で眠っている青年が苦しそうに唸りを

上げる。
　彼の傍にあるスマホはアラーム通知をしており、全てが彼に起床を促そうとしていた。
「ほら、お前ＴＡあるんだろ？　早く起きろっての」
「ん、んー……時間、っす、か……？」
「ああ、アラーム通りの時間だよ。早く起きろ、遅刻すんぞ」
　バイトのことを言われ、そこでようやく意識がゆっくりと働き始める。
　寝ていた椅子から起き上がった彼、岸波は幽鬼のように立ち上がって水道の方に向かう。
　蛇口をひねって顔を洗うと、水道水の冷たさに目が覚めた。
　岸波は水を止めて顔を拭きながら振り返った。
「原田先輩、ありがとうございます。あのままだったら寝坊してましたよー」
「気にすんな、アラームがうるさかっただけだからな」
「男のツンデレとか、流行らないっすよ？」
「お前、次から起こさなくてもいいってことだな？」
「すみません、何でもないでーす」
「ハイハイ、次からもちゃんと起こしてやるよ」
「ほんと助かります」
　何でもない会話を交わしながら、スマホの通知を確認する。
　ソシャゲのお知らせや友人からの何でもない雑談メッセージを返しながら、ＴＡのバイトに向かう準備をする。
「そういえば……」
「どうかしました？」
「お前、また変なおもちゃ持ってきたのか？」
「『変な』って言わないでくださいよ、仮面ライダーのグッズじゃないっすか」
　心外な、という表情を隠さぬまま抗議する。ただ、この年になっても仮面ライダーが好きなだけで、そしてそのグッズと時々研究室に持ち込んで遊んでいるだけだ。

大人になっても仮面ライダーが好きな人間なんて、一定数いるだろうに。
……だが、一つ疑問に思う。
「あれ？　でも俺、昨日は何にも持ってきてないっすよ？」
「前に持ってきたのを忘れてきたとかじゃないのか？　ほら」
顔を上げたタイミングで原田から何かを渡される。
それを受け取って確認すると、それは見たこともないデザインのものだった。少なくとも、特撮系のヒーローにこういったデザインのアイテムはない。
それは長方形型のアイテムで、仮面ライダーで例えるなら変身用のドライバーだろうか。
上部に一部に穴の開いた蓋のようなものが付いており、右上を支点に開閉する。正面の右側には小さな歯車がはめ込まれており、逆に左側は何かがはめ込めるスペースが空いている。見た感じ、フォームチェンジ用のアイテムでも入れそうな感じだ。
「お前のじゃないのか？」
「いえ、俺のじゃないですね……。まあ、俺もそれっぽいなと思うんで勘違いしてもおかしくはないですけどー」
しばらく眺めてみるが、やはり思い当たる節はない。
「でも、お前以外にこんなの持ち込む奴いないだろ？」
「そうですね……」
この研究室にオタク気質の人間は多いが、特撮オタクは岸波一人だけだ。
「ってか、これどこにあったんですか？」
「これか？　礼のパワードスーツ置き場にあったぞ？」
そういって指を差されるので、つられて視線がそちらに向か……
「ちょ、ちょっと待ってください!!　パワードスーツどこ行ったんですか!?」
「は？　知らねぇよ、お前がどこかにやったんじゃないのか？」
「いやいや!!　今朝、あそこに置きましたよ！」

「……俺、８時半くらいからいるが、その時にはもうなかったぞ？」
今朝、岸波が眠ったのが７時半過ぎで、原田がやってきたのが８時半頃。
一時間あれば、どこかへ運び去るには十分すぎる。
「うっそ、マジかよぉ……」
あれは彼の大事な研究結果なのだ。データ自体はＰＣにもあるので再作成は可能ではあるのだが、時間をかけて作ったものが消えたのは事実だ。
思わず頭を抱えると、先ほど受け取ったドライバーが頭に当たった。
「……あ、これ……」
「どうした？」
「これって、犯人の落とし物なのでは？」
「……確かに。それはありそうだな」
パワードスーツが消え、代わりにこれが現れた。これを無関係と決定づけるのは難しいだろう。
「俺、ちょっと事務室の監視カメラに何か映ってないか確認してもらってきます！」
「いや、お前ＴＡだろ？　いったん、先生に事情説明してこい、その間に、俺が行ってきてやるから」
「それもそうですね……すみません、お願いします！」
「ああ、任せろ」
原田に事務室への確認を頼むと、岸波はドライバーを持ったまま部屋を飛び出した。

城西大学　食堂
「んー……再生数はまあまあ、かな」
動画サイトのマイページを開きながら、再生数を確認する。投稿したのが朝方、通勤時に暇つぶしで見る視聴者を想定して投稿しているのもあり、再生数はいつも通りの調子だ。強いて言うなら、もう

ちょっと勢いがほしいところではあったが、それはこれからに期待だろう。
広告収入の方も簡単に確認すると、今度は視聴者のコメント欄を確認する。
この旅は知らない街に行くことがほとんどであるため、検索では見つけきれないような地元民的情報を視聴者から得ることも少なくない。
「んー、相変わらず馬鹿どもばっか……」
呉羽市に着いたということもあり、近隣の街に住む視聴者が会ってみたい等のメッセージを送ってきたり、アンチが脅迫じみたメッセージを送ったりしている。
どちらにしろ、頭の悪いガキの発想にしか見えなかった。こんなことしている自身も大概な人間だと思うが。
画面をスクロールしつつコメントを流していくと、気になるメッセージが目に入る。
「……『怪しい新薬の治験者募集のバイトがあるんです』？　なんじゃそりゃ」
コメを頭の隅に保留してしばらくスクロールすると、二つ三つほど似たような内容の投稿を見かける。
曰く、「何の薬の治験をしているのか一切不明」。曰く、「応募するメールアドレス以外の情報がない」。曰く、「治験に行ってきたという人間が見つからない」。曰く、「本当はヤクザが人身売買に仕える人間を探す窓口である」等々、明らかにナニカの事件のにおいがする案件ではあった。
「バカバカしい、が……数字が取れそうなネタではあるよな……」
最近、少し動画の内容がマンネリ化してきたところだったのだ。ここで、ちょっと面白いネタがあるというのはありがたい。
「ちょっくら調べてみるか……」
安全そうなら実際にやってみる。ヤバそうな案件なら、少し興信所の知り合いにでも連絡して調査を手伝ってもらうか。
どちらに転んでも、今まで以上の数字は出そうだ。

「検索は、夜にネカフェにでも泊まりながらするか」
実況形式で話をすれば、さらにネタが集められるかもしれない。
普段とは違った案件であるため、いつもよりバズる可能性も高い。
今はまだ昼間だ。
大学の食堂でバイトであるデータ整理を進めながら、コーヒーをする。さすがに動画配信だけで生きていけるわけもなく、こうして日中は動画のチェックやバイト、仮眠をとって生活している。
大学の食堂っていうのは非常に便利だ。
別に禁止されているわけでもないので、無関係であっても十分入り込むことができる。また、一日中座って作業していても、カフェやレストランなどと違って痛い目で見られることもない。気が向いた時に生協や食堂で食事や飲み物を買えばいいし、寝るのだって簡単だ。夜はそもそも動画の撮影があるので、開いてなくても構わない。
メリット上げていればきりがない程に、大学の食堂というのは若い放浪人には優しい施設である。
「……よし、ちょっと散歩でもすっかな」
バイトの作業が終わり、座りっぱなしだったからだが軽く悲鳴を上げている。
このまま座って何かする気にはなれないので、大学の中を軽く散歩でもしてから適当なところで寝ることにしよう。

城西大学　構内
やみくもに走っていても無駄だというのは分かっていても、走り回るのをやめられない。
周囲を見渡しながら大学内を回っているが、いつもと何も変わり映えのしない光景が広がっているだけだった。
「……くそ、どこだ！」
担当の教授には事情を説明して休みをもらってきた。それどころか、教授が大学事務や警備に捜索をお願いするように連絡してくれた。本当にありがたい。

Ｐｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒ！
その時、スマホに電話がかかった。相手は大学事務。
「は、はいっ、もしもし！」
『もしもし、岸波さんの携帯でしょうか？』
「はい、そうです。捜索中の研究資料の件ですよね？」
『ええ。警備が監視カメラを確認したそうなので、結果をお伝えしようと連絡しました』
「はい！　それで、どこに行ったんですか？」
冷静にならないとダメなのは分かっているのだが、それでも焦る気持ちが抑えきれない。
『実はですね、監視カメラにはそんなスーツが運び出される様子が一切映ってないんですよ』
「……はい？」
『ですから、研究室のある廊下にある監視カメラを確認しましたが、運び出されたという映像はなかったんです』
訳の分からないことを言われたせいで、思考が停止する。
……誰も、来てない、だって……？
『それどころか、昨日の深夜から警備が確認をしに行った１０時半まで、原田さん以外誰も出入りしていないんです』
「そ、そんなはずないでしょ！　だって、研究室には確かになかったんですよ!?」
『それは、警備も確認したので間違いはないと思うのですが……』
二メートル弱はあるあれをどうすればカメラに見つからずに消すことができようか。窓から出すことだってできないは――
「っ!?　そうだ、窓は！　窓から侵入はどうですか!?」
２１１号室は二階にある。あそこから侵入してばらしてから持ち出すことだって難しいことではないだろう。
『た、確かに！　そちらは連絡して確認してみます』
「はい、お願いします！」
これでようやく、犯人の窃盗方法が絞れてきた。
これで見つかってもらえれば、それで御の字なのだが……。

「っし」
とりあえず、研究棟に行って確認してみればいい。
そう思って体を方向転換させると、急いで研究棟の方へ向かった。

城西大学　理工学部研究棟裏
理工学部研究棟の２１１号室の窓は、人目につかない裏側に面している。こちらには監視カメラはなく、建物内の人間や外の人間がわざわざ伺おうとしない限り、景色がよく見えない場所である。
「……何もない、か」
研究棟の裏は、いつものように波も見えない。普段から植込みの木や他の建物が邪魔になって、ここの様子はあまりうかがえないのだ。
少し奥の様子をうかがってから、岸波は植込みの木を避けながら中へ入っていく。
すると、中には人影が見えた。
それは……
「船尾教授！」
「ああ、岸波君か」
「どうしたんですか、こんなところで」
「どうしたも何も、パワードスーツがなくなったんだろ？　警備に話を聞いてから、ここじゃないかと思って身に来たんだが……」
「なるほど」
船尾昭は岸波の研究室の担当教授で、パワードスーツの件は彼の研究室で代々続いてきた研究だ。その思いは、岸波よりも強いものだろう。
「それにしても、あれを持ち出してどうしようというんだろうか。わざわざデータの方ではなく、完成したばかりの現物を持っていくなんて……」
「それは、そうですね」
現物ではなくデータであったなら、取られたことに気が付くこともなかっただろう。少なくとも、もっと発見が遅れていたに違いない。

いくらＰＣにパスワードが設定されているからといっても、こんな手法がとれる犯人ならデータを盗むことなど造作もなかったはずだ。
「犯人の意図が見えない……」
周囲を歩き回っては、思索にふける探偵のようなポーズをとる船尾。
それはまるで、この状況を楽しんでいるようにも見えた。
「あの、教じ」Ｐｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉ！！！！！「っ、な、なんだ!?」
船尾に声をかけようとした瞬間、岸波の手元から耳をつんざくような警告音が鳴りだした。
音源に目を向ければ、そこにあるのはパワードスーツの代わりに置かれていた謎のドライバー。
「き、岸波君！　君はまたそんなものを持ち込んできたのか」
「違います、これは犯人の落とし物なんですよ！」
「なんだって?」
岸波は事情を説明しながら音を消そうとするが、音を消すような場所が見当たらない。
「なんだよ、これ……」
あちこち押してみるがまったく様子が変わらない。むしろ、警告音はより大きくなっているような気さえしてくる。
Ｐｉｉｉ！！！
警告音は鳴りやむところを知らず、どこまでも際限なく音量を跳ね上げていく。
そして、それは――
「ＧＹＡＡＡ！！！！！！」
――非日常の到来を、彼に告げた。

2話―変身―

城西大学　理工学部研究棟裏

それは、地球上に存在する生物のどれでもなかった。

人の言葉では形容することはできない程、意味不明な容姿ではなかった。しかし、それを説明することは非常に困難を極めた。

もしも、その姿を的確に言い当てる言葉が存在していたとしたら、それはきっと、

「――――バケモノ」

不意を突いて、岸波の口からそんな言葉が漏れた。

体長は2メートル程で、二足歩行をしている。腕は六本あるようにも見え、その顔はまるで人間大に拡大された虫のそれだった。

猫背気味に曲がった体は表情に怪しい影を創り出し、時折聞こえる息遣いはそれが着ぐるみの類ではないことを如実に示していた。

いうなれば、それは人間大になった蜘蛛のようだった。

「Ｇｒｒｒｒｒｒｒｒｒ……」

地を這う低いうめき声が聞こえ、その体が岸波と船尾に向けられる。

岸波は慌てたように船尾を見た。

「ハイド……!?」

「教授、あいつのこと何か知って……」

小さなつぶやきが聞こえ、岸波が聞き返す。

しかし、船尾はそれを黙殺した。

「……岸波」

船尾が視線を怪物から一切そらすことがないまま、岸波に向かって話しかける。

「君は逃げろ」

「な、なに言って……」

「二人が生存する道はない。なら、片方が囮になって時間を稼ぐしかないだろ」

「そんな、でも……」

反論する余地はない。その確信があった。
しかし、それが容認できるほど、岸波は自分本位の人間ではなかった。
怪物が一歩前へ踏み出した。
「岸波！　走れ！」
「っ！」
船尾の声にはじかれるように、岸波は走り出した。
植え込みを飛び越え、外へと駆け出した。
あっという間に岸波の姿は、研究棟裏からは見えなくなった。
「……これでいい」
船尾は目を閉じて笑みを浮かべる。
蜘蛛は、岸波が逃げ出したことに激高したのか息を荒げ始めた。
「おい、こっち向けよ。俺はお前に用があるんだ」
船尾が一歩踏み出した。二人の距離は１０メートルほど。
「Ｇｒｒｒｒｒｒ……」
蜘蛛は完全に岸波から船尾へと標的を移した。
船尾は満足げにうなずき――――

城西大学　構内
行く当てなんて全くなかったが、それでも岸波は必死に走っていた。
道中で他の学生や職員が振り返ってきたが、それに構っているような余裕などない。
ただ、生きることだけを必死に考えて走り続けていた。
「……はぁ、ここまでくれば……」
体力をほぼ限界まで使い果たした岸波は、疲れたようにその場にへたり込んだ。
体中が悲鳴を訴え、これ以上走れる気がしなかった。
「船尾教授……」
立ち止まって思い出すのは先ほどの光景。今でも鮮明に脳裏に焼

き付いて離れない。
　そして、今あの場がどうなっているかなんて、想像することすら恐ろしい。
　あの怪物がなんだったのかは分からない。ヒントになるのは船尾が小さくつぶやいていた言葉だけ。
「ハイド、か……」
　そのままの意味でとらえるなら「隠れる（ハイド）」だろう。
　しかし、それはどうなのだろうか……。
「いや、そんなの考えても仕方ないだろ……。今、俺にできることは……」
Ｐｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉ!!
　盛大な警告音が鳴り響く。
　弛緩していた体中が一瞬にして緊張状態になり、顔の肉がひきつるのを感じた。
　それは、死神の到来を告げる鐘だった。
「……っ!!」
　岸波は慌てて後ろを振り勝った。
「そんな、バカな……」
「Ｇｒｒｒｒｒｒ……」
　そこにいたのは、少量とはいいがたい血を付けたバケモノの姿。
　岸波が全力で走ったあの距離を、このバケモノはあっという間に詰めてしまったというのだろうか。
「きよ、教授は……」
　その体に付いた血から最悪の結果を連想するが、それに答えてくれるものなどどこにもいなかった。
「Ｇｒｒｒｒ……」
　地べたに座り込んだまま、岸波が後ずさる。
　そして、それについてくるようにバケモノが一歩踏み出す。それは、岸波を逃がす気がないことを知らせていた。
「くそ、なんで……」

何が起きてるかなんて、やっぱり分からない。
奴が何で、なぜ自分を狙っているのか。それすら分からないまま、理由すら知らないまま死ぬなんてことがあっていいのか？
「いったい何が、どうなってるっていうんだよ」
口を開けば出てくるのは悪態だけ。
もしもこれが仮面ライダーだったらどうなっただろう。
アークルがあるなら今すぐ変身した。
戦極ドライバーだったらロックシードを取り出したに違いない。
自分が特異点でパスを持ってるなら電王になった。
デッキを持ってるならスマホにでも向けている。
メダルがあるなら三枚選んで欲望の王にでもなってやる。
「……」
だが、岸波はただの人間で、これは信じられなかったとしても現実だ。
ここに、彼が憧れてきた仮面ライダーになるようなアイテムはない。あるのはスマホと財布と、盗人が落とした謎のアイテムだけ。
「Ｇｒｒｒｒｒｒｒｒｒ……」
つまらない考え事をしている間にだって、奴は徐々に岸波との距離を詰めてくる。
まるで恐怖している様子を見て楽しんでいるように、ゆっくりと岸波の方に歩み寄っている。
奇跡の一つなんて起きやしない。
魔法だってありはしない。
ヒーローだってここにはいない。
「く、……っ！」
手に持った犯人の落とし物に目を向ける。
仮面ライダーの最初の変身のように、この謎のアイテムが岸波の窮地を救ってくれるなどといった奇跡が一片でもあるというのなら。
「あああああああああああああああああっ!!!」
それがいくらバカバカしい妄想の類だったとしても。
敢えて、言おう。

しかし、そうだったとしても――――

「奇跡、起きろぉぉぉぉぉっ!!」

――――起きうる奇跡というものは、手を伸ばさずして手に入れることなどできはしないのだから。

【Ｓｅｔ（セット） Ｒｅａｄｙ（レディ）】

腰に当てた謎のアイテムは、音声を流しながら岸波の腰に巻き付いた。

腰の左側には箱状のアイテムがいくつか、気味側には歯車の形をしたアイテムが一つだけ嵌められている。

岸波に与えられた選択肢は、このアイテムに命を預けることだけだった。

「何が起きてるかなんて分かんねぇっ!!」

右側に入っていた歯車を取り出す。歯車の中央に穴は開いておらず、描かれているのは真っ白な一対の翼だけ。

ドライバー上部の蓋を開けて歯車をセットし、蓋を閉める。

「だけど、ここで死ぬことだけは、絶対に嫌なんだよっ!!」

そして、上部からわずかに突き出した歯車を右手で押さえ、

「変身っ!!」

【Ａｎｇｅｌ（エンジェル）―Ｇｅａｒ（ギア） Ｉｎｓｔａｌｌ（インストール）】

歯車を勢いよく回した。

城西大学　構内

それは一瞬の出来事だった。

「……なんだ、あれは……」

最初は映画研究部が撮影でもしているのかと思っていたが、今ので現実なのだと理解した。

蜘蛛の姿をした怪物とここの学生と思われる青年の二人がいた。

怪物がゆっくりと距離を詰めている間に、学生の方が手に持っていた謎のアイテムを取り出した。

周囲にはどこからか賛美歌が流れ出し、青年が光に包まれたかと思

うと、一瞬にして特撮ヒーローのようなものに変身したのだ。
「仮面ライダー、みたいな……」
思わず口に出たが、言ってから納得した。あれは仮面ライダーだ。
顔には十字架を思わせる意匠が入り、目のあたりは赤く輝いている。
体は、背中から生えた一対の翼がその体を包むようなデザインが入っていた。それに対し、ドライバーはメカニカルなつくりになっており、大小二つの歯車がきれいにかみ合っている。
「……って、何してんだ!!　撮影しないと！」
ただ見ているだけだと気が付いた俺は、慌ててスマホを取り出すと録画を始めた。
「ど、どうも、フリューゲルです」
いつものように自己紹介を始めるが、口が全く回っていない。
「何が起きているのかは、俺にも全く分からないんだ。ただ、一つだけ言えるのは、目の前の光景が俺の加工とかそういうものではないってことだけで……えっと、なんつーんだ、分かんないけど、とにかく、目に前に起きてるこれが現実なんだよ。分かんないけど、とにかく本当なんだ」
頭の中が真っ白になって、何を喋っているのかさっぱり分からない。
「なんなんだよ、あれは……」
奴らは戦闘を始めていた。
変身した方は、明らかに素人のそれだった。パンチのやり方なんて全く知らないし、キックだって隙だらけだった。
でも、怪物の方も理性が吹っ飛んだ獣のようで、野生の勘で避けている感じに見えるが、それにしたって技術がなかった。
「はっ！」
ライダーの方が怪物を吹っ飛ばし、チラリと自分の腰の方を確認する。そして、再び突撃。
怪物の方も、倒れた状態からライダーに向かって勢いよく飛び出した。

「ＧＲＲＡＡＡＡ!!」
お手本みたいなテレフォンパンチに、大振り過ぎるひっかき攻撃。
アクション映画で流されたらブーイング必死の戦いだったが、外れた攻撃が近くの木や階段をぶっ壊していくのを見ればその威力のほどはよく理解できた。
「あいつ何者なんだ……仮面ライダーみたいな奴だけどさ」
そうだ。構図が完全に仮面ライダーなのだ。
ベルトで変身して怪人と戦う戦士、なんて。
【Ａｒｍｓ（アームズ）—Ａｒｋ（アーク）　Ｉｎｓｔａｌｌ（インストール）】
怪物をテレフォンパンチで吹っ飛ばしたライダーは、腰の左についていた箱を取り出してドライバーの上を滑らすように動かした。
すると、箱が両刃剣の形に変化し、ライダーの手に収まった。
剣は比較的細身で長さは１メートル程度。鏡のように綺麗な銀色の金属で、どこかロザリオを思わせるような形をしている。
「ぜえええええええっ!!」
そして、両手で剣を構えて怪物に向かって走り出した。
「はっ!!」
一閃。
しかし鋭い爪で受け止められる。
「まだまだあっ!!」
一合、二合と打ち合い、不意にライダーの方が抜き胴を決める。
深く入り込んだ刃は俺にも聞こえるほどの音を立てて怪物から血を飛び散らせた。
真っ白なライダーの体と、綺麗だった剣が赤く染まる。
怪物もわき腹を抑えながら荒く息をするが、致命傷なのは明白だった。
「もう、これで終わりだ……っ!!」
そう言って、ライダーは剣を地面に突き刺した。
そして、左側についていた箱に手を伸ばすと、再びそれをドライバーの上部に滑らせる。
【Ａｇａｐｅ（アガペー）—Ａｒｋ（アーク）　Ｉｎｓｔａｌｌ（インストール）　Ａｎｇｅｌ（エンジェル）—Ｇｅａｒ（ギア）

Ｆｕｌｌ―Ｄｒｉｖｅ【フルドライブ】

ドライバーから音声が鳴り、ライダーの背中から一対の翼が生えた。

周囲に天使の羽が舞い、どこからともなく賛美歌が流れ出す。

ライダーが半身になって腰を落とすと、右足が輝いていくのが分かる。

【Ｍｅｍｅｎｔｏ　ｍｏｒｉ【メメントモリ】

「はっ！」

飛翔。

一瞬にして高度を上げたライダーは、太陽を背にして空中に停止した。

そして、その翼が怪物を囲うような影を造り出したかと思うと、勢いよく下降し――――

「はあああああっ!!」

――――強烈な爆発が周囲を襲った。

城西大学　理工学部研究棟２１１号室

「……」

部屋は水を打ったように静まり返っていた。

部屋にいるのは岸波だけで、他の人間は全員出払っていた。

俯きながら、岸波は手に持っていたドライバーを見つめた。

テレビで見てきた仮面ライダーのような変身アイテム。実際、人知を超えたバケモノを倒すこともできた。

「……いったい、何がどうなってんだよ……」

あのバケモノを倒した後、岸波は呆然としたまま研究室に戻ってきた。

チラリと見た研究棟裏には職員が大慌てで騒いでおり、今は警察も来ている。……周囲に大量の血が飛び散っていたのだ。

岸波も警察に質問をされたような記憶があるが、どこか記憶が霞がかっており鮮明ではない。まるで、今起きていることを受け入れたく

ないように、記憶することを拒んでいた。
おそらく、精神状態が不安定であるため、今日は岸波に警察が話を聞きに来ることはないだろう。
「……ハイド」
船尾があのバケモノを見て呟いた言葉が、いまだに頭を離れない。
なぜ彼はそう呟いたのか。あれを知っていたのか、ただ何かを連想しただけなのか。それすらもよく分からない。
本当に、何が起きているのかさっぱり分からなかった。

呉羽市　某所
「……それで、奴はなんなんだ？」
「それが、俺にも全く分からないんだ。あんなもの、現代科学で作れるのか？」
「知るかよ。質量保存はどうした？　どうして何もないところから、あんな身体能力を発揮する装備が現れるんだ!?」
暗い地下室で、二人の男が話していた。
「あんな、特撮ヒーローみたいな奴が現実にいてたまるか！　おかげで、俺達の計画が台無しだ！」
「……全くだよ。あんなのがいたら、どうしようもないぞ」
遠くから望遠カメラで撮影されたのであろう写真がある。
映っているのは、変身して戦っていた岸波の姿である。
「……奴は何か知っているのか？」
「分からない。まだこれを見せていないからな」
「じゃあ、さっさと確認を取るしかない。この計画のブレイクスルーのきっかけを作ったのは、あの男だからな」
二人が困惑したように話していると、どこかから足音が聞こえてきた。
「事情はこちらも確認していますよ」
「お前、どこに行ってたんだ！」
「すみません。ちょっと確認することがありましてね」

近寄ってきた敬語の男は、胡散臭い笑みを浮かべた。
「いや、とうとうそれが現れたので、こちらも本腰を入れて活動しなければいけませんねぇ」
「やっぱり、こいつのこと知ってるのか？」
「戦っている彼のことは知りませんが、その力については知っていますよ」
男は写真を受け取ると、大きく体を震わせた。

「ああ！　あらゆる者を導き給う、人の子の父なる神よ！
人間があなたを敬うように、あなたも人の子を愛し給え！
ありとあらゆる苦難のうちに、あなたの愛が人の子のささやかなる慰めであることを、我に教え給え！
これからの我らの歩む道と彼が歩む道が、あなたの御手によって交わらんことを！
これは、人の子には耐えがたき試練である！　あなたの力が、彼の救いとなりますよう！
この声が父なる神へと届きますよう！　アーメン！」

叫びは地下室中に響き渡っていた。
その言葉を聞いていた二人の男は、訝し気な表情を見せる。
「お前、クリスチャンだったのか？」
「いいえ、そんなことは」
そう言って男は笑う。
「ですが、これは神の試練ですよ。愛していると言いながら、痛烈な理不尽を与える、くそったれな神様のね」
そして、高笑いはどこまでも地下室に響き渡っていた。

呉羽市　ネットカフェ
「うわぉ、ものすごくバズってやがる」
かつてない程の再生数に目を見張った。

非現実的な光景に信じられないというメッセージを送るものから、「ＣＧ乙ｗｗｗｗｗ」と信じていないようなメッセージを送る奴までリアクションは様々だ。

見た感じ、信じている系のメッセージが３割、信じていないのが７割といったところ。だが、心の底ではだれも信じてはいないだろう。

爆発の瞬間まで撮影された動画を見ながら、フリューゲルは驚いたような表情を見せていた。

「……仮面ライダー、ね」

爆発の瞬間、慌てて顔を護ろうとしたときに撮影終了の場所を押していたらしく、撮影できているのはここまでだ。それより先は撮れていないことに気を取られて忘れていた。

動画とは別に登校していた掲示板には、大量のコメントが寄せられている。

こちらも、信じていない奴が大量にいるようだったが、信じていないが話には乗っている連中が仮面ライダーみたい、という話を始めていた。

「……『じゃあ、こいつの名前を募集。安価は＞＞１５０』……っと」

そのメッセージを飛ばすと、話が一気に盛り上がる。

ネタみたいな名前から、テレビに出て居るライダーまで様々なところが出ているが、とうとう１５０のコメントが付いた。

「なんか、妙にそれっぽい名前が付いたな」

１５１　ファンタジックな名無しさん　：２０１７年０４月１８日　０１：５０　ＩＤ：ａ５ｉ６ａｓ９ｊｉ

＞＞１５０

その由来って何？

１５２　ファンタジックな名無しさん　：２０１７年０４月１８日　０１：５０　ＩＤ：ｎ９ｅｎ４８４ｔｎ

聖書に出てくる名前だろ？　オルフェノクの由来としても出てたし

１５３　ファンタジックな名無しさん　：２０１７年０４月１８日

０１：５１　ＩＤ：５ｈ４８ｈ８４ｎｅ
＞＞１５１
創世記とかに名前が出てくる奴の名前
他の奴は「死んだ」と言われているのに、こいつだけ「神に取られていなくなった」って記述があって、そのせいで天使になったとかっていう逸話があるんだよ
１５４　ファンタジックな名無しさん　：２０１７年０４月１８日
０１：５２　ＩＤ：ｈ８ｒｔｈ８ｔｒ５
＞＞１５３
ガチかよｗｗ
１５５　ファンタジックな名無しさん　：２０１７年０４月１８日
０１：５４　ＩＤ：５ｈ４８ｈ８４ｎｅ
＞＞１５４
ガチだよｗｗ

安価で決まった名前をそっとなぞる。
なんとなくしっくりくるような気もするし、これでいいのかと思ったりもする。
だがまあ、一つだけ分かっていることがある。
「……『仮面ライダーエノク』」
俺の動画の再生数は、このヒーロー様にかかっている、ということだ。